

低炭素社会における「人間の移動」と「移動価値」

に関する文化社会学的研究

Sociological Studies on the Human Mobility and the Value in Zero Carbon Society

研究代表者 奥野卓司

関西学院大学社会学部教授

Takuji Okuno, Kwansei Gakuin University

地球環境汚染の深刻化から、化石燃料を可能な限り使用せず、排出物が吸収・循環可能な「Zero Carbon Society」の構築が提唱されている。当センターでは、その低炭素社会では、生活者、とくに日本およびアジアの若者、女性の移動や文化がどのように変容するかを、質的調査によって解明する。

The severity of the global environmental pollution is growing by the year, and consequently, today the construction of Zero Carbon Society which emissions can absorb and circulate has been proposed. We investigate how Asian youths' and women's mobility culture will change in the future low-carbon society through qualitative research.

1. 研究目的

21世紀は環境とエネルギーの世紀といわれている。近代社会は、テクノロジーの革新と発展によって生産量の飛躍的な拡大をもたらしたが、他方では化石燃料の大量消費によって地球環境への多大な負荷を生み出すこととなった。

このような背景のもと、近年、循環型社会の前提となる「低炭素社会」(Low-Carbon Society)の実現が、世界的な課題として唱導されている。この

課題の解決のためには、政治的なアプローチのみならず、産業界、学問界からの関与が不可欠であるが、とりわけ学問界においては、これまで、広義の「環境問題」に対しては、自然科学の立場からの技術的アプローチが主流であった。他方、人文・社会科学の立場からの学問的寄与は、環境経済学、環境社会学などにおける政策提言的アプローチを除けば、この問題への関心の高さに比して、質・量ともに相対的に低くとどまっているといわざるをえな

い。しかしながら、今後われわれの社会が低炭素社会へと向かうのはもはや不可避であり、来たる低炭素社会における人間の生活や文化がどのように変わるのか、その道筋と帰趨を明らかにするのは、他ならぬ人文・社会科学の任務であると考えます。低炭素社会は決して近代的生活を棄てて前近代に回帰するような社会ではない。低炭素社会は、これまで人間が培ってきた文明を前提としつつ、それを再編し、つくりかえていく創造的な社会である。

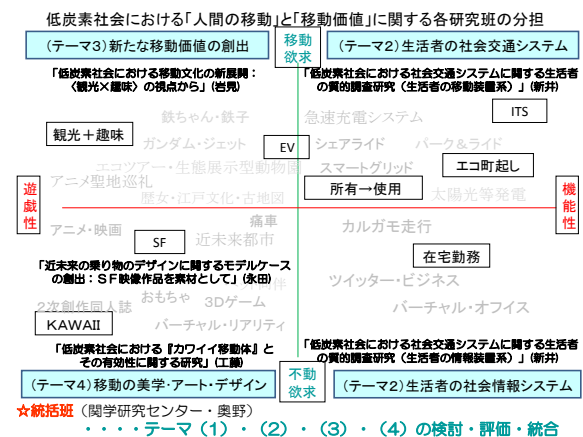
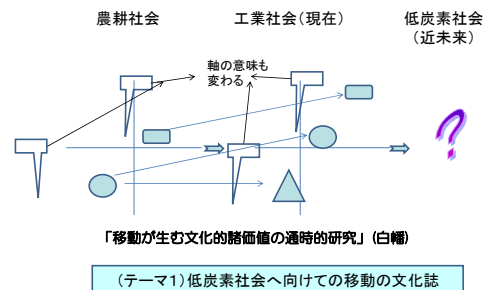
以上のような認識のもとに、本研究では、低炭素社会における「人間の移動」と「移動価値」に着目して、そのあり方について文化社会学の立場からアプローチしていく。また、この研究を体系的に遂行するために、2010年10月に関西学院大学内に「Zero Carbon Society 研究センター」を設立した。

人間の「移動」への衝動が生得的欲求であることは動物学的／心理学的にも周知の事実である。人間が本来「移動」する生き物であることを前提として、「移動」を原理的には最小化しようとする低炭素社会における「移動価値」は、生存のために不可避な最小限の「移動」以外に、そのあり方がいかなるものとなるのかについて明証的に提示することが、本研究の最大の目的である。とすれば、それは従来は余剰的とみなされてきた「遊戯性」の高い「移動」であるという仮説のもとにその検証を行うのが本研究の独自性である。

2. 研究経過

研究にあたって、われわれは以下の図のような枠組を設定した。この枠組にしたがって、それぞれの領域に位置づけられた各研究（テーマ1～4）を統括していくことが第一の達成目標である。上図は「移動価値」のあり方を過去－現在－近未来の視点からモデル化したものである。そして下図は、移動欲求－不動欲求、機能性－遊戯性という2軸のクロスによって現れた「人間の移動」と「移動価値」にかかわる4つの象限を描き、低炭素社会においてキーワードとなる諸概念を各象限のなかに配置したものである。上図は通時的研究、下図は共時的研究として位置づけられる。

移動価値に関する二軸の変容から、近未来へ



この研究目的を達成するために、2011年度は研究会を4回実施し、上述した研究枠組の各部門を担当する研究者からの研究報告を受け、その評価および研究全体の方向性の確認をおこなった。以下に研究会の概要を摘記する。

第1回研究会（2011年4月7日）

- ・ 「3.11」をふまえた、研究方針の再検討
- ・ 各研究班の研究進捗状況の報告

第2回研究会（2011年6月29日）

- ・ 新井菜穂子氏中間報告『低炭素社会における社会交通システム』に関する生活者の質的調査研究

第3回研究会（2011年11月7日）

- ・ 永田彰三氏中間報告「近未来の乗り物のデザインに関するモデルケースの創出：SF映像作品を素材として」（代理報告：桑原圭裕氏）
- ・ 富田英典氏中間報告「モバイルARと新しい移動感覚」

第4回研究会（2012年3月6日）

- ・ 岩見和彦氏中間報告「低炭素社会における移動文化の新展開：〈観光×趣味〉の視点から」
- ・ 土佐尚子氏中間報告「将来の移動体のエンタテインメント性に関する研究」

以上に加えて、研究代表者は、東アジア地域で低炭素技術の応用・実践が進められている地域（台湾、上海）での調査をおこなった。また、東日本大震

災で被災した地域（宮城県）における日常生活移動の実態についてインテンシブな調査を実施し、今後のわが国の被災者支援政策、エネルギー政策のあり方についても検討を加えた。これらの調査研究の詳細について報告するため、『Zero Carbon Society 研究センター 紀要』（第1号）を刊行した。

3. 研究成果

本研究を通して、われわれは、以下のような成果を得た。

(1) 人類社会が狩猟社会→農耕社会→工業社会→低炭素社会（情報社会）へと進歩していく過程で、移動装置の高度化に並行して、人間の移動価値も、異文化との接触から、「見せびらかし」や「遊び」へと変化・拡大してきた。

(2) 近代社会以降、観光を目的とした「移動」が急速に増大してきたが、現代のポストモダン状況においては、観光行動を後押しするのは目的地の魅力だけではない。個人の趣味を発動要因とする「観光地の発明」ともいえるべき潮流が現れてきている。

(3) 近未来社会においては、自動操縦・レール化された移動が技術的に可能となり、個人が単独に地上や空中を「浮遊」するようになることが、SF映画やアニメ作品における移動体イメージの分析からも明らかである。

(4) 現代社会では、これまで重厚長大の象徴であった鉄道や建築が「カワイイ」ものとして意味を付与され、クルマのデザインへの志向も「かっこいい」から「カワイイ」に変化している。カワイイEVや感覚共有型コミュニケー

ション装置としての EV は、かたちやデザインの変化だけでなく、それと結びついた意識、規範、美学の変化も生んでいる。

(5) Zero Carbon Society 下では、「移動体」「移動装置系」の技術進歩と、情報技術・サービスの進展にともなう、移動の機能・効率が向上するため、生活・社会における人々の移動の意味、移動に関する価値観・意識が変容しつつある。一方で、電気自動車 (EV) を始めとする環境負荷の小さな移動体の技術開発と普及が、日本だけでなく、アジアの諸国で急速に進んでおり、遠くない将来にわが国の産業を越えることが予想される。

4. 今後の課題と発展

2012 年度以降の研究上の課題、および本研究の社会的意義は以下の諸点に要約される。

(1) 継続して研究会を開催し、各研究の評価を通じて研究全体の統括をおこない、それに基づいて各研究を推進するとともに、研究全体の総括に向けての共同討論を深化させる。

(2) 引き続き、アジア諸国における移動体技術、移動文化に関する調査を実施し (2012 年はマレーシア、シンガポールを予定)、それら先進技術の日本への適合可能性を模索していく。

(3) 自動車のみならず、日本およびアジアにおける他業種 (おもちゃ、ファッション、情報コンテンツ、観光) の動向を調査し、連携を提案していく。

(4) 移動体に関する先端技術を、クール文化に融合する。すなわち、日本の

技術文化の特質を生かしたモノづくりが近未来の低炭素社会の産業基盤となるべく、技術提案をおこなっていく。

(5) 人間の移動価値の変容から近未来の移動体の「賢い価値」を見出し、低炭素社会での移動体の「あるべき姿」を提示する。

5. 発表論文

『Zero Carbon Society 研究センター紀要』第 1 号 (2012 年 3 月発行)